

ペルテス病の発症後 足関節拘縮を起こした症例



医療法人社団 らぼーる新潟
ゆきよしクリニック

加藤拓 (PT)

三村健 (PT) 清水美穂 (OT) 高野友美 (OT)

荻荘則幸 (MD)

<はじめに>

平成21年4月7日から平成21年11月24日まで当時小学校6年生男児に対して週1回40分2単位の訪問リハビリを実施した。その結果、車椅子から脱却し、自力歩行での通学が可能となった症例を報告する。

＜症例紹介＞

- 15歳，男子．9歳で左股関節にペルテス病を発症する．その後装具着用での保存療法にてペルテス病は治癒したが，装具療法終了後も左下肢へ加重制限していたことで，歩行動作時に左足底接地が出来ず，屋外での長距離歩行が困難となる．
- 訪問リハが介入するまでは外来リハ等行って無く，家族は将来普通に歩けるようになっていた．

訪問リハ導入の理由

- 歩行での移動困難のため外来リハに行くことが出来ない
- 家族に対して自主訓練等を助言できる
- 小学校へ徒歩での通学を希望している

以上の理由より当院訪問リハ開始となる

<初期評価時>

- 自宅内での移動は自立歩行であったが左下肢立脚期において尖足位接地での歩容であった。小学校への通学は車での送迎、学校内の移動は車椅子使用であった。
- 体育授業は見学が多く、球技等の走る動作が必要な種目の参加は殆んど出来ていなかった。

訪問開始時歩容 左下肢立脚期(前期)



<H21年4月>

訪問開始時歩容 左下肢立脚期(中期)



<H21年4月>

訪問開始時歩容 左下肢立脚期(後期)



<H21年4月>

目標設定

①徒歩での通学(長距離歩行動作の獲得)

※自宅～学校まで片道600m

②学校生活において車椅子からの脱却

③体育授業での見学を減らし他の児童と同等の運動能力の獲得

<プログラム>

- 左足関節の背屈可動域の拡大, 左下肢へ加重を促すプログラムを主に行った.
 - ①左下肢下腿三頭筋ストレッチ
 - ②ペルテス病発症前に野球部に所属していた経験より, 立位にてキャッチボール動作を行い左下肢への体重移動を促がした.
- 自主訓練として雑誌と板を使って作成した起立台の上に乗る足関節背屈ストレッチを行うよう本人と家族に伝えた.





H21年7月（訪問リハ介入より3ヶ月）

- 背屈可動域の拡大と左下肢への加重が可能となったことより、屋外歩行練習へと移り、実際に徒歩での通学練習を行う。
- 通学練習の際、小学校校庭にて体育授業参加を目的に跳ぶ・走る等の動作練習を行う。
- 担任と面会して本人の下肢の状態と体育授業参加の安全性を伝える。

H21年11月（訪問リハ介入より7ヶ月）

- 徒歩での通学が可能となる
- 体育授業の参加が徐々に増えてきた
- 学校生活において車椅子から脱却

目標達成によりH21年11月24日訪問リハ終了

- 今後は定期的に当院に通院して経過を追っていくとなる

訪問終了時歩容 左下肢立脚期(前期)



<H21年11月>

訪問終了時歩容 左下肢立脚期(中期)



<H21年11月>

訪問終了時歩容 左下肢立脚期(後期)



<H21年11月>

訪問終了後

- 中学校に進学してからは希望であった野球部に入部する。
- 入部当初は他の部員より練習量は抑えていたが、中学2年生となった現在（H23年8月）では同じメニューの練習を行いレギュラー獲得を目指している。

野球部練習風景



<H23年8月>

<まとめ>

- 小学生という成長期に訪問リハとして関わられたことで、車椅子使用の生活から他の児童と同様に自力歩行での生活が可能となった。
- 身体機能の向上だけではなく通学の練習を実際に行ったり、担任と面会するなど、学校での生活環境を改善することが出来た。

訪問リハ 未介入

- 車椅子使用の生活
- 他児童との運動能力の差が拡大
- 屋外活動の制限



訪問リハ 介入

- 徒歩で通学が可能
- 他児童と同等の運動能力の獲得
- 野球部での活躍

